「地図」は思想の表明でもある

向　後　紀代美

私達は，地図というものが，かなり客観的に地表面をあらわしていると考えがちである。しかし実際に世界のいくつかの国に住んでみて「地図」が，その国の人々の世界観や政治的イデオロギーを表現する役割も果していることに気づき驚くことが多い。

もう，二十年前のことになるが，ロンドンで南北アメリカ大陸を中心とした世界地図が，何気なく日常に使用されているのを見て，ハッとしたものである。アメリカの左側に太平洋，右側に大西洋，そしてそのさらに右側にユーラシア大陸があって，日本はその右のはずれ，地図の端すれすれの所に描かれていた。その時はじめて，日本が「近東」でも「中東」でもなく，「極東」にあると納得したものである。西欧を中心として考えたときに，はじめてこれらの地域名が意味を持ってくるのであり，私達が日本にいてこれらの地名を無批判にとり入れることは，反省してみる必要がありそうである。

近年，西アジア研究者の間でエドワード・サイードという人の「オリエンタリズム」という本が話題になったが，これも従来の西アジア関係の研究や文学の書が，いかに西欧人的思考によって歪められているかということを述べたものであった。

また，知人の某国大使は，所用でカナダのバンクーバーに行くことになった。勉強家の氏は，事前に“日本”の地図帳でその位置と大きさを確認しておいた。飛行機からバンクーバー島が見えたとき，もうすぐ着陸と思ったが，さにあらず。それから氏が予想していたよりかなり長くたってからやっと到着。それで，日本でよく使われている地図帳においては，ヨーロッパとアメリカで，その縮尺と詳しさがちがっており西欧中心の構成になっていることを発見したと語っておられた。

私達が学ぶ「地理学」をはじめとする学問が近代の西ヨーロッパで発達したものであるという「地域性」や「時代性」から，「地図」もまだ逃れられてはいないのだろうか。最近テレビや新聞で報道されたアフリカの「奴隷海岸」や「ホッテントット」「ブッシュマン」などという地理の教科書の記述の問題も，同じ次元の問題としてとらえられよう。

次に，同じ場所が相対して接している国によって，地名が異なっているのを知ったのは，韓国であった。韓国の地図には「日本海」は「東海」，「朝鮮半島」は「韓半島」と記されていた。

イラン，イラク戦争でよくニュースに登場した「ペルシャ湾」はクウェイト，サウディアラビアなどいわゆる湾岸諸国で販売しているバーソロミューの地図では，「Arabian Gulf（アラビア湾）」，または単に「the Gulf」となっている。スイスで発行されたある地図には，全くこの湾の地名が記されていない。世界のお金持が預金をしている国にふさわしい政治的気配りのいき届いた地図といえようか。

三番目には，地表や航空写真よりも地図にくっきり描かれることによって，私達の脳裏に刻みこまれるものとして国境がある。イーフー・トゥアンは「空間と経験（Space and Place）」の中で次のように述べている。「学校の地図帳や歴史書に載っている地図には，民族国家がくっきり引かれた境界線で仕切られた単位として示されている。小縮尺の地図は，人びとに，自分たちの国をそれ自体で完結した一つの独立した実態として捉えさせる。」

私の行ったネパールとインドの国境は，日本の鉄道の「踏み切り」そっくりのものがあるだけで人々は，気軽に隣りの国に仕事に行ったりしていた。またオマーンとアラブ首長国連邦の場合は，道路にスピードを落させる小さな盛り上りがあるだけで，いわれなければ全く気づかなかった。

アジアのいくつかの国では，国境の両側に同一の民族が住み，同じ言語や文化を共有している所もある。そのような事実をまっ赤な「国境線」はおおい隠してしまうこともある。

地図を見るときは，地図が表わしているものを深く読みとらねば，と心しているこの頃である。